

# 劍の呪

——物部伝承考——

守 屋 俊 彦

## 一

### 呪の劍

物部氏は古代の大豪族であった。そして、何時の時代にか大和朝廷に服従し、その官僚となった。しかし、その時期は明かでない。記紀では神武天皇の時のことようになってはいるけれども、これは人皇第一代にもって行ったまでのことで、もとより虚構とすべきであろう。唯、これ以後この氏族が朝廷に反抗したという記事がほとんどみられないところを見ると、早当に早い時期であったとみて置いて差支えあるまい。それならば、物部氏が朝廷の一官僚となった時、一体、どのような職掌によって奉仕することになったのであろうか。この氏族は代々武門の家柄であった。雄略天皇十八年には伊勢の朝日郎を征伐するために物部菟代宿祢と物部目連とが派遣されているし、継体朝に筑紫国造磐井が反逆を企てた際には、物部大連鹿火が自らこの地に軍を進め、「旗鼓相望、埃塵相接。」（継体紀二十年）と壮烈な戦を展開し、遂にこの磐井を平定している。<sup>1)</sup>これらのことは、物部氏が軍事の点で朝廷に仕えていたことをよく物語っている。

そして、このことは物部氏の氏神である石上神宮に多くの武器が収められていることからいえるのである。垂仁

天皇三十九年には劍一千口が藏められたとある。

五十瓊敷命、居<sub>ニ</sub>於茅菟砥川上宮<sub>一</sub>、作<sub>ニ</sub>劍一千口<sub>一</sub>。因名<sub>ニ</sub>其劍<sub>一</sub>、謂<sub>ニ</sub>川上部<sub>一</sub>。亦名曰<sub>ニ</sub>裸伴<sub>一</sub>。裸伴、此云<sub>ニ</sub>阿爾藏<sub>一</sub>二千石播磨我等母<sub>一</sub>

上神宮<sub>一</sub>也。是後、命<sub>ニ</sub>五十瓊敷命<sub>一</sub>、俾<sub>レ</sub>主<sub>ニ</sub>石上神宮之神室<sub>一</sub>。(垂仁紀)

この後この武器は更にふえ、桓武天皇の御代に山城国葛野郡へ移そうとし、「支<sub>ニ</sub>度功程<sub>一</sub>」したところ、単功一十五万七千人であつたという。まさに武器庫の観がある。それにしても、神社と武器とが結びついているというのはいささか異常である。何故にこの神社のみが「異<sub>ニ</sub>於他社<sub>一</sub>」って「多収<sub>ニ</sub>兵仗<sub>一</sub>」(日本後紀卷第十二延暦廿三年二月、廿四年二月)めているのであろうか。物部氏が武士であつたからといって、何もわざわざ武器を神社に藏して置く必要はないのである。他の地でも結構なのである。そこには何かそうしなければならない必然性があつたものともみなければならぬ。

そこで、この垂仁紀の記事の今少し後のところを見ると、八十七年の条に注目すべきことが書かれている。この五十瓊敷命が妹大中姫命に「我老也。不<sub>レ</sub>能<sub>レ</sub>掌<sub>ニ</sub>神室<sub>一</sub>。自<sub>レ</sub>今以後、必汝主焉。」と言って、この劍の管理を譲ろうとしているのである。男性ならばともかくとして、こともあろうに、女性が劍を管理するというのはいささか理解しかねることである。ところで、この大中姫命の妹に倭姫命がある。この方は、いうまでもなく、天照大神を伊勢の地に奉斎した女性である。つまり、神に仕える高級巫女である。すれば、この大中姫命もまたそうした女性であつたとは考えられないだろうか。そういえば、大中姫命という名前は、神と人との交通をとりもつ女性にはふさわしいともいえる。こうした女性が管理しようとした、ということになれば、それは単なる武器というよりか、今少し宗教的な色彩を帯びていたものとみるべきではあるまいか。

さて、この大中姫命は辞退し、結局は物部十千根大連が管理することになったのである。何枚に朝廷から物部氏に

バトン・タッチされることになったのであろうか。物部氏が当時の政界での有力な氏族であった、ということも一つの理由であろう。ところが、一書ではこのところを「是時、神乞之言、春日氏族、名市河令と治、因以命市河令と治。」とし、この市河は物部首の始祖であるとしている。人は違っているけれども、矢張り、管理するのは物部氏であり、しかも、それは神の意志であるというのである。それはまさしく物部氏が管理するのが当然である、というような書き方である。そこで、この当然ということとを、この際政治的なものよりか、物部氏に大中姫命と共通した何かがあったから、というふうにかけてみては如何であらうか。

一体、物部氏の「モノ」という語は、神とか精霊とかを意味する古代語である。それを氏族の名として負っているところからすれば、この氏族は何か宗教的な職に携わっていたとすべきであらう。森田康之助博士は「或る宗教的な権威、即ちモノを深く体した氏族である」とされている。げんに崇神紀七年の条には、物部連の祖伊香色雄をして神班物者としようとして卜ったところ神意に叶ったとある。この点欽明、敏達両朝に、物部大連尾興、物部弓削守屋大連が夫々に仏像礼拜に反対したことは（欽明紀十三年、敏達紀十四年）、興味深いことである。それはこの氏族が保守的であったというようなことよりか、古来の神の道に携わっていたために、宗教的な立場からして当然反対せざるを得なかったとみるべきであらう。<sup>3)</sup>その際、中臣氏と常に行動をともしていることも、このことをよく物語っているといえよう。中臣氏は神に仕える氏族であったのである。

しかるに、この物部氏は現実には武門の家柄であった。すれば、このことと宗教的なものとを一つにしたところに、この氏族の像を絞ってみるべきであらう。そこで思うに、この氏族は、古代という特有の社会が必要とした呪術的戦士であった、というふうには考えられないだろうか。つまり、物部氏は軍事的ではあるが、主として呪術的な側面を通して朝廷に奉仕していたということになるのである。このことを今少し具体的に述べてみたい。

## 二

さて、古代の氏族は神を頂点とする社会集団であった。だから、そこでの戦は、人と人との戦であるとともに、神と神との戦であった。いや、神が頂点であってみれば、神と神との戦が、人と人との戦の前にあり、それがすべてを決したともいえるのである。次の二つの記事は、こうした古代の戦場風景をよく描いている。

仲哀天皇が熊襲征討のために筑紫に行幸されたところ

時岡県主祖熊罽、聞<sub>ニ</sub>天皇之車駕<sub>一</sub>、予拔<sub>ニ</sub>取五百枝賢木<sub>一</sub>、以立<sub>ニ</sub>九尋舟之舳<sub>一</sub>、而上枝掛<sub>ニ</sub>白銅鏡<sub>一</sub>、中枝掛<sub>ニ</sub>十握劍<sub>一</sub>、下枝掛<sub>ニ</sub>八尺瓊<sub>一</sub>、参<sub>ニ</sub>迎于周芳沙摩之浦<sub>一</sub>。而献<sub>ニ</sub>魚塩地<sub>一</sub>。(仲哀紀八年)

とある。賢木に鏡や剣や瓊をかけているのは、神を降臨せしむべき宗教儀礼である。しかるに、ここは、いってみれば、朝廷と岡県主とが対決している場面である。そうした緊迫した際に岡県主は何故にこのような宗教儀礼をわざわざ行う必要があったのであろうか。それは、恐らくは自分達の神を戦場に迎え、この神を先頭に押し立てて敵と戦おうとしている姿勢であろう。しかも、ここは「献<sub>ニ</sub>魚塩地<sub>一</sub>」とあるのだから、この戦に敗れ、服従を誓っているところである。ということになれば、それは岡県主の神が朝廷に臣従を誓っているものとみるべきであろう。それは岡県主の朝廷への絶体的な忠誠の誓となるのである。今一つの場面は日本武尊が東国を征討されるところである。尊は上総国よりいよいよ目的の大陸奥国に入られる際

時大鏡懸<sub>ニ</sub>於王舟<sub>一</sub>、從<sub>ニ</sub>海路廻<sub>ニ</sub>於葦浦<sub>一</sub>。横渡<sub>ニ</sub>玉浦<sub>一</sub>、至<sub>ニ</sub>蝦夷境<sub>一</sub>。(景行紀四十年)

とされている。すると蝦夷達は「然遥視<sub>ニ</sub>王舟<sub>一</sub>、予怖<sub>ニ</sub>其威勢<sub>一</sub>、而心裏知<sub>ニ</sub>之不可<sub>レ</sub>勝<sub>一</sub>、悉捨<sub>ニ</sub>弓矢<sub>一</sub>」(同)たというのである。この大鏡は尊が出発前天皇に対し「頼<sub>ニ</sub>神祇之靈<sub>一</sub>」(同)といわれた、その神の象徴である。それをわざ

わざ舟にかけているのは、岡県主と同様宗教的用意の下に戦に臨んでいるものとみるべきであろう。ここでは、朝廷の神は蝦夷達のそれを圧倒しているのである。この二つの場面を向い合わせて一枚の画面にしてみると、そこに古代の戦場風景が鮮やかに望見されるのである。それはまさに神と神との戦なのである。そしてそれがすべてを決しているのである。こうした呪術的な戦のなかで物部氏は何らかの役割を果たしていたのではあるまいか。

このことを推定させてくれるものとして、崇神、垂仁両朝にわたる所謂出雲神宝檢校事件がある。これは出雲氏族の大和朝廷への服従の歴史的事実を反映しているものであろうといわれている。そこで、この事件をはじめから追ってみたい。崇神天皇六十年に天皇は「武日照命又云、武夷尊、從<sub>レ</sub>天将来神宝、藏<sub>ニ</sub>于出雲大神宮<sub>一</sub>。是欲<sub>レ</sub>見焉。」というので、矢田部造の遠祖武諸隅を派遣された。すると、そこでは次のようなことが起きているのである。

当<sub>ニ</sub>是時<sub>一</sub>、出雲臣之遠祖出雲振根主<sub>ニ</sub>于神宝<sub>一</sub>。是往<sub>ニ</sub>筑紫国<sub>一</sub>、而不<sub>レ</sub>遇矣。其弟飯入根、則被<sub>ニ</sub>皇命<sub>一</sub>、以<sub>ニ</sub>神宝<sub>一</sub>、付<sub>ニ</sub>弟甘美韓日狭与<sub>ニ</sub>子鷗瀦<sub>ニ</sub>而貢上<sub>一</sub>。既而出雲振根、從<sub>ニ</sub>筑紫<sub>ニ</sub>還來之、聞<sub>ニ</sub>神宝献<sub>ニ</sub>于朝廷<sub>一</sub>、責<sub>ニ</sub>其弟飯入根<sub>一</sub>曰、数日当待。何恐之乎、輒許<sub>ニ</sub>神宝<sub>一</sub>。是以、既経<sub>ニ</sub>年月<sub>一</sub>、猶懷<sub>ニ</sub>恨忿<sub>一</sub>、有<sub>ニ</sub>殺<sub>ニ</sub>弟之志<sub>一</sub>。仍欺<sub>ニ</sub>弟曰、頃者、於<sub>ニ</sub>止屋淵<sub>一</sub>多生<sub>ニ</sub>菱<sub>一</sub>。願共行欲<sub>レ</sub>見。則隨<sub>ニ</sub>兄而往之<sub>一</sub>。先<sub>レ</sub>是兄竊作<sub>ニ</sub>木刀<sub>一</sub>。形似<sub>ニ</sub>真刀<sub>一</sub>。當時自佩之。弟佩<sub>ニ</sub>真刀<sub>一</sub>。共到<sub>ニ</sub>淵頭<sub>一</sub>、兄謂<sub>ニ</sub>弟曰、淵水清冷。願欲<sub>ニ</sub>共游沐<sub>一</sub>。弟從<sub>ニ</sub>兄言<sub>一</sub>、各解<sub>ニ</sub>佩刀<sub>一</sub>、置<sub>ニ</sub>淵辺<sub>一</sub>、沐<sub>ニ</sub>於水中<sub>一</sub>。乃兄先上<sub>ニ</sub>陸<sub>一</sub>、取<sub>ニ</sub>弟真刀<sub>一</sub>自佩。後弟驚取<sub>ニ</sub>兄木刀<sub>一</sub>。共相擊矣。弟不<sub>レ</sub>得<sub>ニ</sub>拔<sub>ニ</sub>木刀<sub>一</sub>。兄擊<sub>ニ</sub>弟飯入根<sub>一</sub>而殺之。(崇神紀)

この神宝はその後長い間行方不明になってしまった。そこで、次の垂仁天皇は再びこの神宝を檢校されることになった。

廿六年秋八月戊寅朔庚辰、天皇勅<sub>ニ</sub>物部十千年大連<sub>一</sub>曰、屢遣<sub>ニ</sub>使者於出雲国<sub>一</sub>、雖<sub>レ</sub>檢<sub>ニ</sub>校其国之神宝<sub>一</sub>、無<sub>ニ</sub>分明申言者<sub>一</sub>。汝親行<sub>ニ</sub>于出雲<sub>一</sub>、宜<sub>ニ</sub>檢校定<sub>一</sub>。則十千根大連校<sub>ニ</sub>神宝<sub>一</sub>、而分明奏言之。仍令<sub>ニ</sub>掌<sub>ニ</sub>神宝<sub>一</sub>也。(垂仁紀)

ここで先ず何よりも注意しなければならないことは、この事件が始めから終りまで、一つの神宝をめぐる起きているということである。もっといってみれば、この神宝を何故か朝廷が執拗に要求し、出雲氏族はそれを強硬に拒否しているということである。神宝を容易に朝廷に手渡しした飯入根は遂に兄の手にかかって殺されることになったりしている。いささか理解しかねるようなことが次から次へと起きている。

出雲の服従ということであれば、そこには当然武力的な戦や、それによる服従というようなことがあってしかるべきである。ここには、それが伝説的な形で表現されているとみられないこともない。しかし、よしそれらのことが実際にあったにせよ、ここにみられるのは、まぎれもなく神宝を取ったとか取られたとかいうことだけである。神宝そのものから離れる訳にはゆかないのである。だから、ここでは、古代氏族における神宝の意味を考えてみなければならぬのである。一体、古代の氏族は、祖神の象徴として、玉や剣や鏡のごときものを神宝として持っていたのである。すれば、呪術的な戦からして、これらの品々を奪取することは相手の死命を完全に制することになり、一方取られた側は相手に絶体的に服従せざるを得ないことになる。だからこそ、朝廷はこれを繰返し要求し、出雲振根は激しく拒否し、飯入根は氏族の裏切り者として殺されるはめになったのである。つまり、ここは服従の伝説的表現なのでなく、これこそがまさに出雲氏族の服従そのものを語っていることになるのである。それは神と神との戦をまた別な角度から語っているのである。

さて、ここで問題となるのは、実際にこの神宝の検校にあたった人物である。崇神朝では矢田部造遠祖武諸隅であり、垂仁朝では物部十千根大連である。物部十千根大連は、前の石上神宮に蔵めた剣一千口を管理した人物である。一方、矢田部造は新撰姓氏録によれば「矢田部連伊香我色乎命之後也」(左京神別上)とあって、物部氏の一族なのである。<sup>5)</sup>つまり、この事件にはそもそものはじめから終りまで物部氏一族のみが関与し、しかも、垂仁朝には誰一人

檢校に成功し得なかったのに、十千根が一度派遣されるや美事に成功したということ、更には、この神宝を朝廷ではなく、当の十千根自身が管理したということは、そこに深い意味があるものとみななければならない。この神宝檢校と物部氏との間には何か密接な関係があるらしい。

そこで考えられることは、物部氏は、こうした際に、降下した神靈を管理し、その呪力によって、相手の神宝に宿っている呪力を圧える、というようなことでもしたのであるまいか。もし、そうだとすれば、これら一連の事実の意味がはっきりしてくるし、物部氏という氏族の名前にもふさわしいことになる。物部氏の職掌の一つに石上の鎮魂がある。旧事本紀に「若有<sup>ニ</sup>痛<sup>ニ</sup>處<sup>ニ</sup>者。令<sup>ニ</sup>茲<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>宝<sup>ニ</sup>謂<sup>ニ</sup>一<sup>ニ</sup>二<sup>ニ</sup>三<sup>ニ</sup>四<sup>ニ</sup>五<sup>ニ</sup>六<sup>ニ</sup>七<sup>ニ</sup>八<sup>ニ</sup>九<sup>ニ</sup>十<sup>ニ</sup>而布瑠部。由良由良止布瑠部。如<sup>レ</sup>此<sup>レ</sup>為<sup>レ</sup>之者。死人返生矣。是則所謂布瑠之言本矣。」（天神本紀）とあるように、死せる人を呪術によって復活させるというのだから、言ってみれば、人間の生命そのものに關する職に携わっていたことになる。これをもっと広く拡げて軍事の面にもって行ってみれば、物部氏は本来戰闘そのものに参加するのではなく、一後にはそのようなことになったのだが、一その管理せる強力な呪力を駆使することによって、相手の神宝の呪力を除いたり、押えたり、破ったりして、その氏族の生命そのものを制することを使命としたとみるべきではないだろうか。この場合でいえば、出雲の神宝にこもる呪力を圧伏することによって出雲氏族を屈伏させ、それを自らが管理することによってその呪力を常に押え、出雲氏族の蠢動を未然に防ぐというようなことをしたのである。

しかし、呪力といっても、それが宿るものは、鏡や玉や劍などさまざまである。物部氏はそれらのうち主としてどれを取り扱っていたのであろうか。物部氏が武士であり、石上神宮に多くの武器が蔵されているところからすれば、この際劍として置くのが穩当なところであらう。つまり、物部氏は、劍に神靈を降下させ、その呪力によって相手を屈服させることを、その本来の職掌としていたのであろう。神武記をみると、高倉下が獻上した劍が石上神宮にあ

り、それが佐士布都神、甕都神、布都御魂などといわれていたとある。これらの名前に共通しているフツは神霊、または神霊の降下を意味している。すれば、このことから、こうしたことはいえそうである。ということになれば、その対象もまた主として相手方の剣にあったとすべきであろう。戦の際相手の氏族も剣にこもる呪力によって立ち向ってきた筈である。その呪力を打ち破るのである。だから、服従した氏族の剣が、朝廷にはなく、当の石上神宮にあり、物部氏が管理していたというのは、考えてみれば、まことに当然なことなのであった。服従した氏族の蠢動を未然に防ぐためには、朝廷の側の呪力の宿る剣と同居せしめることによって、常に相手側の呪力の発動を押える必要があったからである。こうして、石上神宮には、朝廷の側の剣は勿論のこと、朝廷に服従した氏族の剣が収められ、従って、多くの剣が蔵せられることになったのである。積日本紀に

私記曰。問。大己貴神曰。吾以<sub>レ</sub>此矛<sub>ニ</sub>卒有<sub>レ</sub>治<sub>レ</sub>功。天孫若用<sub>ニ</sub>此矛<sub>ニ</sub>治<sub>レ</sub>国者。必当平安云々。此矛今在<sub>ニ</sub>何処<sub>ニ</sub>哉。答。雖<sub>レ</sub>為<sub>ニ</sub>三種宝物之外<sub>ニ</sub>。此矛有<sub>ニ</sub>治<sub>レ</sub>国之名<sub>ニ</sub>。已奉<sub>レ</sub>獻<sub>ニ</sub>天孫<sub>ニ</sub>。定伝<sub>ニ</sub>之後葉<sub>ニ</sub>欵。然而所在不詳。但如<sub>レ</sub>此神器。上古多納<sub>ニ</sub>石上神宮<sub>ニ</sub>。若今彼神宮欵。(述義四)

とあるのは、この間の事情をよく説明しているものである。更には、垂仁紀八十八年の条にも、これを裏付けるような話がある。この天皇は、出雲の神宝ばかりでなく、但馬の天日槍が将来った神宝をも要求されている。その時、清彦が献上した玉、鏡、刀等は、「皆蔵<sub>ニ</sub>於神府<sub>ニ</sub>。」とある。ここの神府が石上神宮の神庫のことであるとすれば、この話からもうかがうことがわれるのである。

物部氏は具体的にはこのような職掌によって朝廷に奉仕していたのであろう。そして、それは、物部氏という氏族名の示す通りに、この氏族がもともとから保持していたものであり、しかも、それが他の氏族のそれに比べてきわだったものだったために、服従後はそれによって朝廷に奉仕することになったのであろう。それは、あたかも出雲氏族



が巫医的な性格が強く、そうした面から朝廷に奉仕していた関係にも似ているのである。ところが、このような呪的世界が衰退するにつれて、物部氏は呪術的戦士から武士へと面変わりし、呪力の象徴たる剣も単なる武器となり、そうしたところから、石上神宮は多くの武器を蔵することになり、あたかも武器庫のごとき観を呈するに至ったのである。そして、物部氏の持っていた呪的なものは、鎮魂祭という個人の生命に関する宗教儀礼として残ることになったのではあるまいか。何れにしても、武器庫になるには、なるだけの素地があったのである。

## 三

物部氏の職掌が本来このようなものであったとすれば、古代の氏族のあり方として、当然それに関連した神話を持っていた筈である。そしてまた、物部氏が朝廷に服従し、そこでの有力な官僚になっていたのだから、それらの神話が記紀の中に取り入れられているだろうということは十分に予想されるところである。

そこでまず思いつかれるのは、出雲平定神話の条である。この神話には、あの出雲神宝檢校事件が投影されているといわれている。しかるに、今述べたように、物部氏はこの事件の解決にきわめて重要な役割を果している。すれば、この条の何処かにこの氏族の神話が埋没しているものとみられるからである。そこで、剣を一応の目安にして探してみると、建御雷神が伊那佐の小浜に降りているところがある。古事記に

是以此二神、降<sub>ニ</sub>出雲国伊那佐之小浜<sub>ニ</sub>而、

伊那佐<sub>ニ</sub>字<sub>以レ音</sub>

拔<sub>ニ</sub>十掬劍<sub>一</sub>、

逆刺<sub>ニ</sub>立于浪穂<sub>一</sub>、

跌<sub>ニ</sub>坐其劍前<sub>一</sub>、問<sub>ニ</sub>其大国主

神<sub>ニ</sub>言、天照大御神、高木神之命以、問使之。

汝之宇志波祁流<sub>此五字以レ音</sub>

以レ音

葦原中国者、我御子之所<sub>レ</sub>知国、言依賜。故、

汝心奈何。

とある。建御雷神が十掬劍の切っ先に坐し、大國主神を睥睨している姿はまさに劍の呪力を神話的に表現したものと  
いえよう。この時大國主神は、この國譲りについての返答を八代言代主神と建御名方神に譲ったとある。この二神は  
大國主神の呪的な側面と、武的なそれを夫々に象徴したものである。だから、この二神を一つに組み合わせる  
ば、それは呪術的な武力ということになる。ここには呪術的なものによる戦の姿勢がみられる。すれば、これに立  
向う高天原——大和朝廷——の側も当然そうしたものによって鎧われていなければならない。それがこの建御雷神の異常  
な姿である。従って、そこにはこうした呪力を扱っていた物部氏の活動が考えられなければならない。神武記によれ  
ば、熊野平定の際、建御雷神はこの劍を自己の身代りとして降し、それが今ほかならぬ石上神宮に坐す、とあるのだ  
から、ここに劍の呪力を管理した物部氏の神話が入っているものとみて置いてまず間違あるまい。天菩比神や天若日  
子によって果されなかった出雲の國譲りが、この建御雷神の活動によって決定的となったとする筋は、誰によつても  
分明でなかった出雲神室の檢校が、物部十千根大連によって美事に果されたとするそれとまさに軌を一にするもの  
である。

この劍は、今述べたように、この後神武東征の際熊野の高倉下の家に降っている。すればここにも物部氏の神話が入っているものとみてよいだろう。

故、神倭伊波礼毘古命、從<sub>ニ</sub>其地<sub>一</sub>廻幸、到<sub>ニ</sub>熊野村<sub>一</sub>之時、大熊髮出入即失。爾神倭伊波礼毘古命、倏忽為<sub>ニ</sub>遠延<sub>一</sub>、及御軍皆遠延而伏。遠延二字以レ音。此時、熊野之高倉下、此者人名。賣<sub>ニ</sub>横刀<sub>一</sub>、到<sub>ニ</sub>於<sub>ニ</sub>天神御子之伏地<sub>一</sub>而獻之時、天神御子即寤起、詔<sub>ニ</sub>長寝乎<sub>一</sub>。故、受<sub>ニ</sub>取其横刀<sub>一</sub>之時、其熊野山之荒神、自皆為<sub>ニ</sub>切仆<sub>一</sub>。爾其惑伏御軍、悉寤起之。故、天神御子、問<sub>ニ</sub>獲<sub>ニ</sub>其横刀<sub>一</sub>之所由、高倉下答曰、已夢云、天照大神、高木神、二柱神之命以、召<sub>ニ</sub>建御雷神<sub>一</sub>而詔、葦原中國者、伊多玖佐夜芸帝阿理那理。此十二字以レ音。我御子等、不平坐良志。此二字以レ音。其葦原中國者、專汝所<sub>ニ</sub>言向<sub>一</sub>之國。故、

汝建御雷神可<sub>レ</sub>降。爾答曰、僕雖<sub>レ</sub>不<sub>レ</sub>降、專有<sub>下</sub>平<sub>ニ</sub>其国<sub>一</sub>之横刀<sub>ヲ</sub>、可<sub>レ</sub>降<sub>ニ</sub>是刀<sub>一</sub>。此刀名、云三佐士布都神、亦名云三豐布都神、名云三布都御魂、此刀者、坐三石上神宮一也。  
 降<sub>ニ</sub>此刀<sub>一</sub>状者、穿<sub>ニ</sub>高倉下之倉頂<sub>一</sub>、自<sub>レ</sub>其墮入。故、阿佐米余玖<sub>字以音</sub>汝取持献<sub>ニ</sub>天神御子<sub>一</sub>。故、如<sub>ニ</sub>夢教<sub>一</sub>而、且見<sub>ニ</sub>己倉者、信有<sub>ニ</sub>横刀<sub>一</sub>。故、以<sub>ニ</sub>是横刀<sub>一</sub>而献耳。(神武紀)

劍が降ったというのは、その呪力の降臨を意味するのである。ここには劍の呪力降下の宗教儀礼が物語的に述べられているらしい。この劍の出現によって「惑伏」していた神武天皇とその軍隊は、その深い眠りから覚め、荒ぶる神々を言向けたという。これは相手の呪力によって押されていたものが、この劍の強力な呪力によって、これを跳ね返し、遂には屈伏したことを語るものなのであろう。つまり、ここには、劍の呪力を迎える儀礼と、その発動の効果とが述べられていることになる。劍の呪力に関することであり、その劍が現に石上神宮にあるというのだから、これらの神話を伝承していたのは物部氏であったとすべきであらう。ここで一つの興味あることは、この劍の降った場所である。倉の中となっている。神武紀にも「開<sub>レ</sub>庫視之、果有<sub>ニ</sub>落劍<sub>一</sub>、」とある。しかも、この家の主人の名が高倉下とあるところからすると、相当に高い倉であったらしい。ところで、垂仁紀八十七年の条を見ると、石上神宮に蔵められた劍は天神庫に入れられ、しかも、この庫は「神庫雖<sub>レ</sub>高、我能為<sub>ニ</sub>神庫<sub>一</sub>造<sub>レ</sub>梯。」とあるように高いものであった。このような類似した点がみられるところからしても、ここに物部氏の神話が入っているものとみて置いてよいだろう。現に旧事本紀(天孫本紀)では、この高倉下は物部氏の遠祖となっている。なお、ついでにいえば、この劍の出現が、神武東征の際、戦局転換の契機になっていることも、出雲平定神話や出雲神宝檢校事件の場合と似かよっている。ただし、ここには宗教儀礼がこれらの場合よりか一層具体的に描かれている。

さて、この神話は神武紀にも載っている。そこで、記と比べてみると、その大筋においては殆ど変りはないが、どちらかといえば、紀の方が整って居り、細部においてやや詳しいように思われる。紀では武甕雷神は天照大神の言葉

に對してまず「雖予不行、而下予平國之劍、則國將自平矣。」と答へ、その後で更に高倉下に「予劍号曰『師靈』。師靈、此云三赴、今當置汝庫裏。宜取而獻之天孫。」と命令を下している。ところが、記ではこの二つの言葉が一つづきになっていて、どの部分が天照大神への答であり、どこからが高倉下への命令なのかはつきりしない。そこに幾らか混乱がみられる。この命令に対して紀では「高倉曰『唯々而寤之。』」とある。そこには神と人との応答の呼吸が感じられるのだが、それは劍に宿る呪力を迎えるための宗教儀礼の一つの所作ではなかったかと思われる。また、高倉下の倉の中に劍が見出される場面であるが、そのところが紀では「倒立於庫底板。」とあって、その状況が記よりかはつきりと描かれている。つまり、紀の方が宗教儀礼をやや詳しく伝えていることになる。

ところで、神武紀(記)には物部氏の降臨神話もある。してみると、神武紀(記)の構成には物部伝承が相当大幅に群れをなして塗りこめられているものとみられるのである。それにしても、出雲平定や神武東征の条など、記紀においてきわめて重要な場面に物部伝承がみられるということは、そこに物部氏の強大さを十分にうかがうことが出来るのである。ただし、ここで一寸述べて置かなければならないことは、高倉下がその劍を神武天皇に献っているというところである。物部氏の本来の職掌からすれば、高倉下自身がこの劍の呪力を操って敵を圧倒したとありたきところである。この劍は物部氏にとっては、きわめて重要なものである筈である。いわば、この氏族の生命にかかわるものである。それを天皇に献上したとあるところには、物部氏の朝廷への服従や忠誠の姿勢をみるべきであらう。つまり、ここには物部氏の職掌についての神話がみられるのだが、それがやや歪められた形になっているのである。それは物部氏の降臨神話が朝廷への忠誠の意志の表白となっているのと同じような現象である。

- 1) 雄略朝に吉備下道臣前津屋が謀叛をした際にも、「天皇聞是語、遣物部兵士卅人、誅殺前津屋并族七十人。」(雄略紀七年)と物部氏が派遣されている。

2) 森田康之助博士 葛城・磯城・石上(「大倉山論集」第一輯)二二四頁

3) 井上実氏も「この家もまた呪術を事とする神職の家筋であった。この頃には神祇祭祀の職能は中臣氏に移り、物部氏はすでに武人の家として自他ともに許していたであろうが、しかし宇麻志麻治命以来の相伝の巫呪の家風は、保守的現状維持の性格が宗教的儀礼の一つの重要な面であって見れば、一朝一夕にして忘れ去ることのできるはずのものではなかった。いゝかえれば、物部氏の仏法拒否の態度は呪の家柄としてむしろ必然的なものですらあったろう。」(旧事本紀の成立「武庫川学院女子大学紀要」第一集七〇頁)と言われている。

4) W・R・スミスは古代社会は宗教的であるとし、「私が今それに言及した排他性は、その礼拝者たちの族闘や戦争に際して、神々によってとられる役割の中に、自然もとても徹底的な表現を見出す。神の敵と、その神の民の敵とは同一である。」と言い、古代の戦には、その神の象徴としての「神の像或は神の記章が、軍隊とともに戦場に向ふ」ことを、エホバの顕現としての契約の櫃などを例としてあげている。(W・R・スミス著 永橋卓介訳「セム族の宗教」岩波文庫「前篇六一頁」)この際参考となろう。

5) 日本古典文学大系 日本書紀上 二五一頁 頭注一七

6) 宮地直一博士は、この二つの職掌の關係について「さり乍ら兩者の間に本質的間隔を横たへるのではなく、古神道に於ける呪術と武事との連繫による現象に出發し、その後時を経るままに漸く分化を生ずるに至ったものと解するのが妥当ではあるまいか。」(上代史上に於ける石上神宮「神道論攷」第一卷一〇頁)と述べられている。

7) 日本古典文学大系 日本書紀上 二七頁 頭注四 もっとも、この際には、その小刀は「昨夕、刀子自然至於臣家。」と清彦の家に再び帰っている。出石の小刀に宿る呪力が朝廷のそれよりか強かったということにでもなるうか。崇神紀六十年に一度献上された筈の出雲の神宝がその後行方不明になり、出雲に帰っていたということの背景には、これと同じような理由が介在しているのかもわからない。

本稿は古代文学会第百回記念発表会において「物部伝承について」と題して口頭発表したものの後半を更に補訂したものであり、「古代文学」第八号「神武紀と物部伝承」のつづきにあたる。